

# 鹿 踊 歌 考<sup>(1)</sup>

本 田 安 次

柳田国男先生の「遠野物語」の最後の項に、獅子踊歌が沢山のせられてゐる。  
遠野郷の獅子踊に古くより用ゐたる歌の曲あり。村により人によりて少しづゝの相違あれど、自分の聞きたるは次の如し。百年あまり以前の筆写なり。

とあり、その頭註に、  
獅子踊はさまで此地方に古きものに非ず、中代之を輸入せしものなることを人よく知れり

とあるのだが、その獅子踊歌は六十二首あり、その内訳は、橋ほめ、門ほめ、家ほめ、馬ほめ、町ほめ、検断ほめなどのほめ歌が二十八首、柱懸り、雌獅子狂ひ、浪合などの踊歌が二十二首、踊の後、座敷に招ぜられ、酒肴が出た折の座敷ほめが六首。別に、踊を踊るといはゆるお花が出る。獅子踊ではこれを投草といふが、その投草をほめる歌が六首である。

東北地方の獅子踊の組々は、御承知のやうに、家々をめぐつて演ずるので、橋を渡るときには先づ橋をほめる歌をうたつてから渡り、富に至れば鳥居をほめ、宮をほめ、農家に至れば先づ門をほめ、家

をほめ、庭をほめ、馬屋をほめ、倉があれば倉などもほめるといふことがあつて、あと踊になり、後、もし座敷に招ぜられることがあればその座敷や、お酒や、御馳走や、給仕の女衆までもほめる。又、獅子に投草が出れば、これをいたゞく前に、中立が必ずほめなければならぬ。その投草には、のし袋に入れたお金も出るが、米や小豆や野菜や、又、紙や扇などが出来たりもする。時には妙なものも出で、中立がそれをどうほめるかと興味をもつたりする。これは宮城県清水目の鹿踊での話であるが、或る時、中立を困らせようと思つてか、膳の上にふるだびき（蟾蜍）をふちからげにして、その上に僅かばかりの錢をのせて出した人があつた。しかし中立は即座に、へ膳の上にふるだびき、ふじの巻狩出されて、腰の口錢僅かなりけり

と歌つたといふ。又、三方の上に米一升と、立鳥帽子に刀を添へて出されたこともあつた。このときには、  
へお米の上に立鳥帽子、重代刀を供へおされた、恐れながらもこれで戴く  
と、刀諸共頂かうとしたので、当人は慌てゝ刀だけはやつと返して

もらつたといふ。かうしたいきさつは今はもう見られなくなつた。

獅子踊の歌は、大方はこの讃め歌・座敷歌・投草歌と、踊歌とから成つてをり、座敷歌、投草歌はない所もあるが、先づ歌ふ讃め歌、そして踊歌には、獅子踊歌としての特色がある。

遠野地方の獅子踊歌を誌した本は、「遠野物語」のものゝ外に、私はなほ二本を見ることが出来た。その一は、こちらの伊能嘉矩氏が写された元禄三年奥書本で（この奥書は、「遠野物語」のよりも更に、百二十年あまり古い）、これには三十首ほどの歌が誌されてゐる。二は鈴木重男氏の写本で、これは明治四十三年に古本を写し

たものを写されたものゝやうで、これには重複の七首を除いて、百二十六首が収められてゐる。「遠野物語」の歌の倍あるわけである。

そしてこの二本は、対校してみると、もと同本に出たものらしく、重複の歌とも、讃め歌が五十七首、座敷歌が七首、投草歌が五首、踊歌が六十四首ある。

獅子踊歌には、特色があると申したが、ここに鈴木氏本によつて若干の例をあげてみよう。（表参照）

### 遠野鹿踊歌（鈴木氏本・他）

#### 讃め歌

- 1 へ 参り来て これのお長屋見申せや  
四十二にはらり立つなり
  - 2 へ 参り来て このお馬屋見申せや  
四十二匹で朝草を刈る
  - 3 へ 朝草に 桔梗尾花を刈りませて  
是のお馬屋は花で輝く
  - 4 へ 参り来て 是のお庭を見申せや  
四方四角で樹形の庭  
樹形の庭の表を見申せや
- 14 へ 参りきて 鳥居のかゝりを見てやれば  
丸木柱にくる木なるらん
  - 15 へ 参りきて お庭のかゝりを見てやれば  
から梅から松から椿 さても見事な庭のかゝりよ
  - 16 へ 参りきて 拝殿かゝりをみてやれば  
なかむね造りに茅葺よ いつもたいせん参るおかぐら  
「お殿踊」より
- 17 へ お殿へ参りて 御門かゝりを見てやれば

### 三重県阿山郡島ヶ原村の雨乞踊歌

#### 「お宮踊」より

14 へ 参りきて 鳥居のかゝりを見てやれば

15 へ 参りきて お庭のかゝりを見てやれば

16 へ 参りきて 拝殿かゝりをみてやれば  
なかむね造りに茅葺よ いつもたいせん参るおかぐら

#### 「お殿踊」より

小金小草は足にからまる（以上常の家）

柱白銀 扉は黄金よ

18 へ 参り来て 此よなお庭で踊りをすれば

つなぎ立たる名馬七匹

七匹の中に立たるかげの駒

知行は増し候 こまのあしかげ

5 へ 参り来て 是の御馬屋を見申せば

繫綱へて名馬七匹

七匹の中に立たる黒の駒

御世代揃と足がきをする（笠津田、其他）

## 踊歌

6 へ 鹿島の馬場のむら／＼すゝき

葉先揃へて 切りを細かに

7 へ 焼山の兎は何見てはねる

十五夜お月を見てはねる

8 へ 中立は 庭に入ろや中入ろ

中立ないと 庭もすげなや

9 へ 京で九貫の唐絵の屏風

一重にさらり ほんと立候

19 へ 参り来て 此よなお庭で踊りをすれば

こがね小草は足にまとわる

20 へ 中立入れよ／＼ 中立入らねば すへないと

21 へ 七つ拍子や八つ拍子 九つ小拍子 とのとねやせんやの

22 へ 立つ鷺も あとを思へば水すます

あとをにござず 立つは友達

23 へ かしまのおばゞのむら／＼すすめ

はさきを揃へていざかへろ 左ゞまわる

すゞめがかへろばなもかへろ 右ゞ戻る

## 「大しんがく」より

### 「小しゆんやく」より

24 へ 京から下りし唐絵の屏風

たんだ一重に立ち廻れ／＼

いよふないよふ じゆんきやくやつからかつからか

……ほふしゆんきやくや

12 へ 白鷺は あとを思へば立ちかねる

水も濁さず立てや白鷺（木の沢）

13 へ 太鼓のしらべをきりきりとしめて

鷺は 笹の梢に巣をかけて

かいごをとられて笹を怨めた

参照	4	—	19
	8	—	20
—	22	9	—
	13	—	27
	12	5	—
	10	6	—
	11	7	—
	25	23	—
	21	26	—

26 ヘ 奥山の兎く 何を見てはらむく  
十五夜の月を見てはらむ  
やんかつからくかく やんくくくかつからくか  
ほふしゆんきやくや  
27 ヘ 太鼓の胴をきりとしゆめて  
さゝらをしやんと すりとめた

さて、大陸わたりの伎楽、舞楽に系統を引く二人立の獅子舞は、今日殆ど全国に、沖縄にまで分布してゐるが、こちらにあるやうな一人立の獅子は、実は全国的ではなく、妙なことに、信濃、三河を境に、日本を東西に分けて、東日本にだけ、但し所によると殆ど各集落にと云つてよいほど沢山分布してゐる。尤も、東日本だけと云つても、実は慶長十九年（一六一四）、仙台の伊達秀宗が伊予宇和島に移封のとき、仙台の八つ鹿踊をお供につれて行き、これが今は宇和島周辺に、八つ鹿踊、五つ鹿踊などとなつて行はれてをり、又、寛永十一年（一六三四）、川越の酒井忠勝が若狭の雲浜に国替のときつれて行つた三四獅子が、今もそのまま伝承されてゐて、この二ヶ所のが例外である。

この一人立獅子踊の頭に頂く獅子頭は、大陸渡りの伎楽系獅子舞のやうなライオンの獅子ではなく、先づ、ことに関東に多く見られるやうな龍頭、又、猪のしし、鹿のししなど日本に昔から居るししゃである。その一組のおししの数は、三頭が多く、四頭、五頭、六頭、七頭、八頭、十二頭などいふものもある。この獅子は、遠野及び下閉伊一帯のは、腹に太鼓を下げず（以前は下げてゐたと思ふ）、別に

笛方と共に太鼓打が出て太鼓を打つが、これを例外として（同様に太鼓を省くに至つたところを除いて）他は皆、太鼓や羯鼓を前に下げ、獅子自らがこれを打鳴らしながら踊る。又、注意すべきは、その背に、幣束、或は柳（柳枝）、さいへいなどと呼ばれるものを打違ひに一本差し、或は腰差し、さらなどと称し、高いさゝら竹をさす所もあり、旗を背負ふ所もある。遠野のは八頭、首毛にかんながらをふつさりとつけてゐるのが特色であるが、やはり腰差し二本もさしてゐる。それに遠野のは、獅子あやしと見られるふくべ振り、さゝら摺り、刀振りなどのつきものが大勢出る。尤も、つきものが出来るのはこゝだけではなく、棒遣、団扇持ち、天狗、蠅追、道化、猿、花笠のささら摺り、或は一、二基のまんどうなど、色々花やかなものが出る所もある。

ざつとかういふわけであるが、ここに一つの不思議は、獅子にこれほどの変化がありながら、それに歌はれる歌といふのが、信州から津軽まで皆同じ類のほめ歌であり、踊歌であり、一字一句殆ど同じにさへ歌はれてゐる。変つた歌と言へば、盆の供養に踊られてゐる所には、和讃や念佛が加へられてゐる程度である。

さて、信濃、三河を境に、西日本には、二ヶ所の例外を除いては、

一人立て太鼓を打つ獅子踊は全く行はれてゐないと申したが、その代りと云はんばかりに、この西日本には、太鼓踊が、所により羯鼓踊、諫鼓踊、ざんざか踊、ざんざこ姫踊、雨乞によく踊られるところより雨乞踊、太鼓のことを樂ともいふので樂、樂打、白太鼓踊など、色々の名にも呼ばれて、これも所によると各集落と云つてよい程沢山、鹿児島、種ヶ島に至るまで分布してゐる。

これは獅子踊と同じく、太鼓を腹にしたもののが、(例外に、太鼓を地上に置いてゐる所もあるが) 大勢、これを打ちながら、輪になつたり、列になつたりもし、陣形も色々かへながら、踊歌に合せて踊るといふものである。その踊手は頭に鉢巻、或は花笠を冠る所もある。その背にはやはり幣束二本、或はそれが著しく風流化した枝垂れの花、鳳凰の翼、大団扇、幟、旗、笛竹等を背負ふ。鬼、猿、天狗、稚児などのつきものの出る所もある。獅子踊とちがふところは、踊手が獅子頭をつけるか、つけないかだけのやうに見られる。

私は、太鼓踊はいはゆる田樂躍の変化したものと考へてゐる。この田樂躍は、早く平安朝からの記録があるが、これが農家の田植をはやすることにも用ひられた。それは韓國に於ける農樂(ノンガク)である。それが今日も、広島、島根地方に、離し田、花田植、田楽などと呼ばれて、盛大な形で残つてゐる。早乙女たちが、さんばいと呼ばれ的小さからを持つた童頭とりとかけ合に田植歌をうたひながら、田を植ゑる。その後で、大きい太鼓を腰にしたもののがこれを打ちながらその拍子をとる。田植が大変はかどるといふのであつて、その田植歌を誌したものも、田植草紙として今沢山、広島、島根地方に残

つてゐる。

この離し田の田樂衆が、も一度地上に上つて、歌をうたひながら獅子をし、踊つたのが、芸態から見てもこの太鼓踊であつたやうに思はれる。そして忽ち西日本にひろく行はれるに至つたのではない

かと思ふ。

もとの田樂躍には、一、二の例外を除いて、歌をうたふことはなかつたが、この太鼓踊では、前に申したやうに、獅子踊同様、但し甚だ風流化されてはゐるが、背に各様の依代を背負ふ。これは田樂躍や離し田にはなかつたものである。この太鼓踊と獅子踊の両者をもし同類と見るなら、この太鼓を打つ芸能は、ひろく日本全土に分布してゐることになる。

たゞ、この獅子踊や太鼓踊が、一体どこから始まつたのか、今となつては尋ねることが甚だむづかしい。せめて、この東・西の両者の関係、どちらが先に発生したのかくらゐは明らかに出来ないものだらうかと日比考へてゐた。

一人立の獅子が、なぜ腹に太鼓を下げて、これを自ら打つのか、これは考へてみると不思議なことである。伎樂系の二人立の獅子舞には、そのやうなことは無論ない。

ただ、ライオンのやうな顔をした獅子が一人立て、腹に太鼓、或は羯鼓をつけ、これを打つてゐる絵が、寛永頃(一六二四—一四四)とあるのが「筠庭雜考」に、又、「東海道名所記」(一六六〇年頃刊)や「人倫訓蒙図彙」(一六九〇年刊)等にも見えてゐるが、これらは何れも旅のお獅子で、太鼓打を一人連れて行く余裕もなく、自らが

太鼓打を兼ねるといった格好である。

もう一種類、この獅子よりも注意されるのは、北野神社祭礼絵巻や、西鶴が「諸艶大鑑」や、善光寺寺務所玄関の衝立に画かれてゐる腹に太鼓、或は鞆鼓をつけた龍頭の獅子である。これは何れも雨乞の獅子のやうである。……とすると、雨乞の太鼓は雷鳴に通ずることになり、これだと太鼓を鳴らす理由も解るやうに思ふ。東日本の人立の獅子踊は、氣をつけて見ると、関東以外にも龍頭と思はれるものが少くなく、雨乞にも晴乞にも踊られてゐるが、この脈を受けてゐるのではないかとも思はれる。

さて、この獅子踊と太鼓踊との関係であるが、これを探る手掛りはやはり歌にある。

西日本の太鼓踊の方の歌詞を詳しく点検してみると、それはさすがに新旧様々である。花田植の田植歌は、もともと田の神を降す祈禱の歌に出てをり、それに即興歌や当時の流行歌などを色々とり入れ、草紙にも書とめられて固定するに至つてゐるが、この太鼓踊の歌も、雨乞に踊られることが多かつた故に、雨乞の一曲が大体入つてきるもの、その他には、鎌倉、室町の頃巷を歌ひ流した放下の歌をはじめ、その頃全国的に流行り、田植歌にも多くとり入れられた物語小歌風の歌が多く歌はれてゐるのに気付く。尤も田植歌では、田植の作業に適するやうに、繰返しや掛け合いつつの型が出来てゐて、それに合ふやうに歌ひ直されてゐるが、太鼓踊になると、それが又もの形に返つてゐる。かうして新たな歌も次々に加へられて、その曲の数の多きをも誇つてゐる。

西日本の広い範囲で歌はれてゐる太鼓踊歌の多くは、曲数が多い

が決して一揃のものではなく、当時興味を引いたであらう色々の歌が次々に集められた形である。特に近畿諸方の歌には、注意すべき歌が含まれてゐる。例をあげてみよう。

例へば、三重県阿山郡島ヶ原村の雨乞踊は、この村に中村、町、川南、奥村、大道、中矢、谷尻など七ヶ集落があつて、各集落から一つ宛七つの太鼓が出て、白壇の名木ある正月堂の広庭などで演奏されてきた。こゝでは太鼓を踊手の腹につげず、地上に置いて打つ。しかし暫く絶えてゐたのを有志が復興をはかり、昭和二十七年に復活したのであつたが、翌二十八年八月十五日、近畿一帯に大豪雨があり、災害甚だしく、島ヶ原地区も、家二十軒、三十棟ほどが川の氾濫によつて押流された。そのため、折角復興した雨乞踊も、気が引けてそのままになつてしまふかに見えたが、名を「太鼓踊」と改め、ともかくも私が訪れた昭和四十一年までは継続してきてゐた。もとは雨乞の折にのみ演じたといふが、今は適宜、夏季に日を定めて催す。こゝに伝はる歌本には、「上方」と「下方」の二本があつて、上方には三十七曲、下方には二十五曲が伝へられてゐるが、この上方は、浅野建二氏編「続日本歌謡集成卷四」に収められており、下方の方は、偶々私の「語り物・風流三」に收めてゐる。两者共通の曲は十五曲、上方になくて下方に伝承されてゐる曲は十曲、計四十七曲がこの村に伝へられてゐるわけであるが、西日本を通じての太鼓踊歌の一つの代表的なものと見てよいであろう。その太鼓踊の曲といふのは、

御宮踊、お殿踊、北野踊、阪本踊、駿河踊、小しゆんきやく、大しんがく、千松踊、十七踊、姫子踊、鶏踊、牛若踊、放下踊、

鐘巻踊、鳴子踊、……

等である。徳川初期にはやつた踊の数々を、雨乞のためとしてとり入れたものであつた。

この太鼓踊の歌に含まれてゐる東日本の獅子踊歌と関連ある歌といふのは、先づ「お宮踊」、「お殿踊」等に歌はれてゐる讀め歌と、「小しゆんきやく」・「大しんがく」に限つて歌はれる踊歌とである。この踊歌は、他の曲の歌に比べてやはり著しい異色がある。これを先の、遠野その他の獅子踊歌と対比してみよう(先の表参照)。御覧のやうに、ただ小異のみを以て歌はれてゐる。なぜこんな類似があるのであらうか。

ところで、獅子踊と共通の歌をもつてゐるのは、三重、滋賀、京都、奈良諸県の範囲で、しんがく・しゆんきやくの外、本により準役、神役、神樂などとも書かれてゐるが、何の意味か明らかでない。たゞ解るのは、これが一種の囃子言葉であつたことである。太鼓踊なので、

カラ／＼カツカラ／＼カ、サじんやくや  
或は「おうじんやくや」「サーじんやくや」などと、太鼓拍子の後あとにつけて囃す。しかしながら「じんやく」と囃すのか、そしてこれが曲名にまでなつてゐるのはなぜかが不明である。獅子踊の方にはこの囃子言葉はとんと耳に入つてこない(追記参照)。この獅子踊歌と太鼓踊歌とを比べてみよう。

○獅子踊では、ほめ歌をほめ歌として歌つてゐるが、太鼓踊では、このほめ歌を踊歌にして、他の踊歌と同様踊りつゝ歌つてゐる。この点では、ほめ歌をほめ歌としてゐる獅子踊の方が古風と思は

れる。

○獅子踊の踊そのものは、各所色々に変化してゐるが、舞樂風の極めて美しい踊を伝へてゐる所もあり、概して振が複雑である。それに対し、太鼓踊の方は、重い太鼓を腰につけ、これを打ちながら踊るので、踊の振も制約され、自づと簡略なものになつてゐる。(但し太鼓の打ち方には、複雑な打ち方をする曲もある)

○獅子踊の踊歌の大半は、振を暗示し、振を促すやうな囃し歌である。そしてバラツド風の歌は殆ど歌はれてはゐない。それに対し、太鼓踊の「じんやく」を除いた主とする曲の踊歌は、殆ど小歌、もしくはバラツド風の歌、ものづくりの歌などである。獅子踊や「じんやく」の、この振を促す歌は、踊歌としては一段古風である。

かう考へてみると、疑問は残るもの、獅子踊の方が「じんやく」をその一、二曲にとり入れてゐる太鼓踊よりも早く行はれてゐたのではないかと考へられる。

実は私は、初めは太鼓踊が先で、獅子踊は太鼓踊に獅子頭をかぶせた形かと考へてゐたが、それはどうやら反対であったやうである。太鼓踊の古色蒼然たる放下歌も、それをそのまま歌つてゐる所は少く、殆ど歌ひなほされてゐる。又、古い伝承の歌も、言はゞ新しく興つた踊の曲にとり入れられてゐる形である。それに対し、獅子踊の讀め歌は、その時々の即興歌ではあるが、即興歌をうたふといふそのことが古風であり、踊り歌の方も、古拙のまゝに歌はれてゐることが注意される。

獅子踊も太鼓踊も、先に申ししたやうに、いつ、どこに発祥したの

かは不明であるが、人々の好みに合つて、丁度今日各地に太鼓芸がはやるやうに、東・西夫々たちまちにひるまつて行つた。そしてそれが今まで、多く昔の美しさを保つて伝承されてきてゐるのである。

註(1) 本稿は、昭和六十一年六月八日、遠野市に於ける日本口承文芸学会大会での講演要旨である。

## 追記

以上のお話をした後、友人、新潟の佐久間惇一氏より「私が調べた越後の獅子舞歌の中に、じんやくがありましたよ」とさゝやかれました。それは耳寄りなとお聞きすると、それは「越後の風流獅子踊り」(『無形の民俗文化財記録第六集』一九八一年、新潟県教育委員会)の中に報告しておかれたといふ。その御本なら私も贈られて持つてある筈、早速参照してみませう。「なほ」と佐久間氏はつけ加へられた。「大川谷中学校教諭、田中真吾氏が、「じんやく」に興味をもつて色々調べられてゐますよ、帰つたらそれをコピイして送りませう。」そして早速それが送られてきた。私は大変嬉しかつた。そして意外にも思つた。なぜ田中氏が「じんやく」に興味をもたれたのかといふことについてである。

佐久間氏が調べられた「じんやく」の歌はれてゐる獅子舞といふのは、新潟県岩船郡山北町府屋のもので、この山北町といふのは、新潟県の北、最奥の地、山形県の西田川・東田川と接する所である。昔(天明か寛政一七八一~一八〇一年の頃かとも)乞食のやうな老

僧が府屋に流れついた。念佛堂に泊め、村人たちが親切に介抱してやつたので、旅人は健康をとりもどし、そのお礼に柳の木で獅子頭を彫り、獅子舞を教へて行つたといふ。今は八月七日、宿で足ならしの舞あり、八月十六日午前、鎮守神明社の前で奉納される。小獅子、マメサシ、大獅子とあり、小獅子がいはゆる三匹獅子舞で、マメサシは三四匹獅子舞と同じ仕度であるがたゞ獅子頭はつけず、三人とも右手につばめ扇を逆に持ち、太鼓を打ちながら踊る。ともに小学三年より六年迄の男の子の役である。大獅子が二人立の獅子舞で、これは青年達の役。このマメサシの踊のとき、「艮逆躍歌」といふのが歌はれるが、それは左の如くである。

### 艮逆躍歌(マメサシ)

〔艮逆ははろかに野をはるかに〕 酒屋が近いなら 御酒も  
あげましようよ

(傍書は、田中真吾氏「山北町の獅子舞考」[昭和五十一年三月、山北町郷土史研究会]との異同)

〔獅子の子は京で生まれて伊勢育ち腰に差したは伊勢のおはらいだ

〔からかさのしめたるくろにこまかけてぐるりぐるりと引くは仲立ち

〔浜千鳥沖くる波に立ちよりてあいくる波に三拍子かな  
〔おいらかあねこのはたおる拍子七つ拍子八つ八つ拍子

〔うちわの拍子うちわの拍子あらばあういでみせ申うそう

かな

へうぐえすは 船のともいに巣をかけて 波に打たれて ぱつと

立たれた

(これより三人にて躍り、元の躍りとなる)

へ京のごくわんの唐絵の屏風

一重にさらりとたてまわした た

てまわした。

へ武藏野の月の入れめに山もなや 尾花かくれて獅子がよろこぶ

又、同じ山北町の寒川の獅子舞にも、今この曲は絶えてゐるが、

「ぎょんぎやく」の曲があり、その歌三首が田中氏本に記録されて  
ある。それは左の如くである。

### ぎょんぎやく歌

ぎょんぎやくおどりもをはるおはる

さがやがちかくてごしをごしをだ

むかえこやまの長じよの御花

つぼんでひらえでなががつたかた

きよねんぞぞてた竹やら今年竹やら

一年竹やしふしそろはね

昭和五年前は、先づ八月十六日大伝寺、常福寺で舞ひ、最初に

「ぎょんぎやく」、次に都踊の寺前を踊ることになつてゐたといふ。

ふと思ひつき、もしやと思つて、「佐渡の小獅子舞」(新潟県教育

委員会同上記録第五集、一九八〇)を繙いて見ると、杉野浦の小

獅子舞の「走り歌」の中の「かんびやく衆」とあるのもこれではな  
いかと思はれた。五首の歌がある。

走り歌

京でごかんの唐絵の屏風

サラリと一重に立て廻し 立て廻し

かんびやく衆 (歌も踊りも)

一、かんびやく衆を立ち寄り聞けば面白や

鼓の音が何時も絶えせず、何時も絶えせず

二、一つ飛んだはキリギリス 続いてはねたは綾の機織り、綾の機織り

三、黒雲に風打ちかけて来る時は

月の光もかなわざるもの、かなわざるもの

四、さららをやめてこきりこにふどと、こきりこにふどと

五、あの里に雨が降るやら雲が出た

いざや友達化の都へ、花の都へ

「かんびやく衆へここから三匹が三角になつて踊る」「『かんびや

く衆』は、普通の走り歌と、歌の調子は同じだが、踊りは違つて難

しい」ともある(佐々木義栄氏調査)。

しかし、この杉野浦の小獅子舞も、田中氏の御本を読み進んでみると既に気づいてをられた。田中氏はこの「良逆」を追及して、新潟のみならず、山形県をも採訪され、群馬県の文献もあり、なほ西日本太鼓踊歌の「じんやく踊」にも触れてをられる(同書「追記」)。

田中氏本によると、山形県西田川郡温海町木野俣(山北町の隣町)  
の獅子踊歌の最初に左がある。

ぎょんき やく踊り

三拍子いよ三拍子

○きょんきやくはるかにやうはるかに  
酒屋が近から 御酒申しもの

○わよんぎやく殿の腰にさしたる小わきさし  
つばもうちの目も黄金なるもの

○廻れ廻れ水車 おそらく廻ればせきにからまる

○鶯が庄屋の林に巣をかけて

祝い目出度く常にさへづる

○からかさのしめのろくろにこまかけて  
ふせぜずおこさずこまのおりひざ

○友べにかけて八穂でうる  
うらばかいたや国の土産に

○ひきうた

東みて引くか引かぬか横雲に  
今引きはなしは名残り惜しさよ

他に、いち親、御所立、しおどり、別吟くるひ獅子、曲謡、寺踊

等の曲がある。

右の第一の歌「酒屋が近から」は、山北町の府屋、寒川でやはり最初に歌つてゐる歌で、他には見当らない歌なので、これらは同流であらうと田中氏も推察してをられる。

群馬県の獅子舞に關しては、田中氏は、「群馬縣勢多郡誌」によれば、「吟、変」、また「群馬縣利根郡古馬牧村誌」によれば次の歌が

あるとして紹介されてゐる。

～参り来て神の鳥居を眺むれば

黄金笠木に白銀の枠 ヤン順、逆よ

～此の宮はいかなる好き日に立てたやら

年に一度の米がより候 ヤン順、逆よ

そこで私も思ひついて、「群馬県郷土民謡集」(群馬県教育委員会編、昭和四十六年三月)を調べてみると、果してこゝにもよい資料

があつた。

吾妻郡中之条町大道新田獅子舞唄

お神門でなにがなるやらと出て見れば、稻穂揃えの秋風の音、

やあ順逆よ(順逆廻り)

鶯が金のこきたけくわえ来て、是れの稻穂が八穂で八石(次四

首略)

しだれ柳を引きとゞめ 是れに宿れよ十五夜の月

〔綱切〕(十三首のうち)

京で九官の唐絵の屏風、一度にさらりと立てやまわりた、やあ

順逆よ

天神林のむらむら雀、羽先き揃えてきりきり返すよ、きりきり

返すよ

嫁子たちささらが見たくば板戸をお出しゃれ、板戸の上でさわ

ら三拍子、さらさら三拍子

他に「岡崎」の曲がある。最初の歌の終りに括弧でくゝつた「順逆廻り」は、曲名に準ずるのであらう。又、「多野郡上野村塩之沢獅

子舞唄」に、

ひら、つくば、せんぎやく、笛がかり  
等の曲があり、「せんぎやく」の唄には、

廻れ廻れ水車　おそらく廻りてせきのと廻るな

京から下る唐絵の屏風、一重にさらりと引きや廻した  
山雀がさしこのうちにもどり打つ　あれを見まねにもどり打

たれた

等、皆で二十一首あるが、これには女獅子隠しの歌も交つてをり、  
繰返しの歌もそのまゝ数へての数である。

因に、雌獅子隠し、鉄砲踊等は、幣掛り、花掛り、三拍子などと  
比べて、一段新しく仕組まれたものではないだらうか。

「民俗芸能研究」第三号（民俗芸能学会）は、昭和六十一年五月  
二十日の発行になつてゐるが、実際にはやゝおくれて配られた。こ  
の号に山路興造君の「三匹獅子舞の成立」が発表されてゐる。この  
論文を通読し、私が雑誌「まつり」から要請されて書いた「獅子舞  
について」（昭和五十五年六月）——それには「小じむやく」「大じ  
んやく」のことに触れておいたのであつたが——よりも前に、既に  
中村茂子さんが「芸能の科学」十（昭和五十四年三月）に、「じん  
やく踊考」を、つづいて同十一（昭和五十五年三月）に、「いりは。  
では・ひきは—風流踊 風流系獅子踊を中心に—」、又、「民俗芸能  
研究」創刊号（昭和六十一年五月）に青盛透氏が「風流踊の構造—獅  
子の位置をめぐつて—」を発表され、何れにも「じんやく踊」につ  
いて触れられてゐたことを知り、私の不勉強を大いに恥ぢて早速こ  
れらを拝読した。中村さんのも、青盛氏のも、詳細且つ綿密な御研

究であり、じんやく踊と獅子踊との関係についても興味深く考を進  
めてをられたのであり、大いに啓發を受けた次第であつた。

さて、じんやく、じんがく……等の語が何に出てゐるかについて

は、中村さんが早く気付かれたやうに、小寺融吉氏に「じゅんぎや  
く踊、或は順逆踊か」との説あり（郷土民謡舞踊辞典 昭和十六  
年三月）、中村さんはまた「順逆踊」が本来の曲名であつたのでは  
ないかとされてゐるが、「じんやく踊考」、先に引いた群馬県獅子

舞の「順逆廻り」「やあ順逆よ」「ヤン順逆よ」などは、中村さんの  
結論にまた有力な資料を提供してゐるやうに思はれる。そしてその  
順逆は、大道獅子舞の代表者に電話で聞き当つたところによると、  
前庭、後庭とあるその前庭の最初に舞はれるもので、獅子が輪にな  
り、むしろゆるやかに振があるといふ。但し順になり逆になり振が  
あるのかどうかは、実見しないと正確には言へない。しかし先の表  
の歌23の「左さまわる」「右さまどる」とあるのなども、参考にな  
らう。

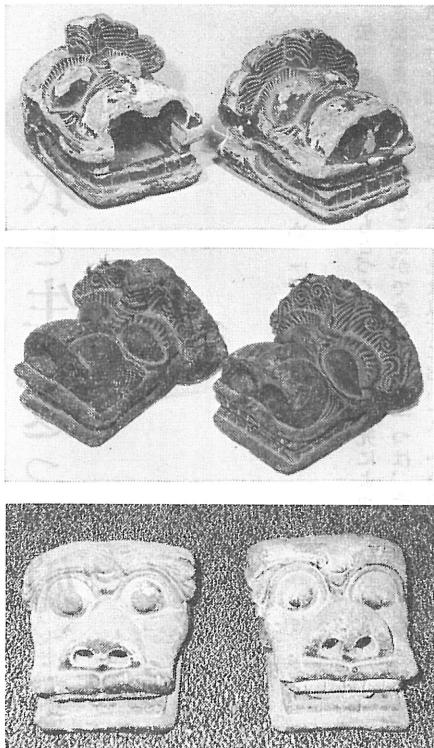
さて、山路君の論文では、新たに発表された図3乃至5の画証が  
貴重である。先に述べた龍頭雨乞獅子の資料に、更に三を加へたこ  
とになつたからである。（図6は、私も曾て桑名でこの屏風を見せ  
ていたとき、写真にも撮つておいたが、正に関東の獅子舞の図であ  
る）ことに江戸岡屏風（図5）のに、花笠のもの四（笛吹二、さゝ  
ら摺二）が画かれてゐるのは注意に値する。

さて又、肝心の獅子踊と太鼓踊との先後の問題については、中村  
さんのも山路君のも、偶々私の此度の考とは反対になつてゐる。ど  
ちらかであるべきなのだが、さて決定にはなほむづかしい節もある。

もう一思考を進める要があらう。そのためには、東・西両者の歌をもう一度注意深く点検しなければならないであらう。又、獅子踊でいふ出端、入端とは何をさすのか、それは誌されてゐる歌と必然的な関係があるのかないのか、といふことなども、実際の演技に当つて考察の要があらう。その現行が本来かどうかもたしかめなければならぬ。(昭和61・8・11)

#### 附 記

昨年(昭和六十一年)十月二十八日より十一月二十三日まで、東京都町田市の市立博物館で、多摩地区並にその近隣の一人立三四獅子舞の頭百二十余点の展示があつた。又、同十一月二日には、群馬県



伊勢崎市文化会館ホールでも群馬県の同じく三四獅子舞の頭七十余点が展示された。これらの頭が、龍か猪か鹿か、少くとも何れの積りなのか、又、何れが多いかを確めたく、両方とも見に行つた。その結果判つたことは、意外にもその殆ど全部が(但し、雌獅子は別として)立派な角を持つてゐたことであり、顔も概して長く、龍頭といふことのやうであつた。(中には面相がどう見ても二人立のライオンや、目に特色ある猪に似たものもあつたが、それらにも立派な角があつた。群馬で枝のさいた角のある頭を持つた一ヵ所では、鹿頭だと云つてゐた)そして注意されたのは、雌獅子のが失はれたのであらうといふ古い二頭が、町田市博物館の方に二組、群馬の方に一組出てゐたことである。その一(写真上)は秋川市引田、海老沢雍昭氏蔵、下顎に元禄十五年(一七〇三)の墨書き銘があり、二(写真中)は年号はないが、五日市町山田、八幡神社蔵、三は群馬桐生市、津久井英太郎氏蔵。なほ、能谷市池上、古宮神社から出陳された寛永五年(一六二八)在銘のは、旧家石川氏宅より発見されたものといふ(写真下)。さて二頭きり残つてゐなかつたので、雌獅子を補ひましたといふものであつた。又、数日前、町田市博物館の畠山豊氏より送つていたいた写真のも二頭対、福生市熊川の旧家石川氏宅より発見されたものといふ(写真下)。さてこれらはもともと二頭のものではなかつたのかといふ疑問があつとおこつた。二頭とあれば雌雄、二人立獅子舞と同様。たゞ、江戸図屏風その他に見るやうな大ぶりのものでないのが気にかかる。(まつり通信)昭62・1も参考照)(昭62・2・20追記。写真は何れも畠山豊氏撮影)